

戦後の日本点字図書館事業発展の要因： 「事業報告」調査より

The factor of the business development of the Japan Braille Library which made a fresh start after the war: In the Business Reports from 1948-1958

NISHIWAKI Tomoko

西 脇 智 子

日本語コミュニケーション学科准教授

抄録：

本稿は「日本点字図書館」と改称して戦後の再出発した図書館事業発展の要因を探るために実施した同館の「事業報告」調査結果である。図書館事業発展の主たる要因は、蔵書数増加にもっとも尽力した点訳奉仕活動である。特筆すべき研究成果は、同胞による奉仕、すなわち「盲人読者による点写奉仕」が奉仕活動の一翼を担っていた史実が判明したことである。

Summary：

This report investigated the factors in the business development of the Japan Braille Library after it resumed operations after the war. The main factor was “volunteer translators into Braille” which this study is notable for being the first to clarify this point, which is determined from the heading “Volunteer Copying by Blind Readers” in the library’s business reports for 1948-1958.

キーワード：日本点字図書館、点訳奉仕、盲人読者、点写奉仕、本間一夫、事業報告

Keywords： Japan Braille Library, Translation into braille Volunteers, Blind person Reader, Copy down Volunteers, Kazuo HONMA, Business Reports from 1948 to 1958

はじめに

「点字図書館」とは、点字図書を収集するとともに自ら製作し、これを郵送貸出し、盲人の利用に供する施設であるが、終戦後制定された図書館法には「点字図書館」について何らの規定も

なかった。「点字図書館」という文字が法のなかに見られるのは、身体障害者福祉法¹⁾である。この第5条に「身体障害者更生援護施設」の一つとして点字図書館と点字出版施設があり、同第33条に「点字図書館は無料または低額な料金で点字刊行物を盲人の求めに応じて閲覧させる施設とする」、同第34条に「点字出版施設は無料または低額な料金で点字刊行物を出版する施設とする」と規定されている(本間2004:490)。

「点字図書館」の蔵書は、点字出版社が発行する点字図書を購入するよりも、奉仕者が寄贈する手書き写本²⁾の占める割合が大きい。したがって、「点字図書館」は点訳奉仕運動の賜物ともいえる。「点訳奉仕」とは、晴眼者³⁾が点字を習得し、活字書を無料で点字に訳して盲人の読書用に供することである。

日本ライトハウス⁴⁾の創業者である岩橋武夫(1898-1954)は、1922(大正11)年秋に点字出版事業を始めた。点字本の絶対的な不足を補うため、1929(昭和4)年にフレンド点字写本奉仕会(FBS)を組織して点字図書製作活動を開始させている。1932(昭和7)年には、岩橋の自宅を開放して点字図書の貸出が始まり、さらに、1935(昭和10)年に開館したライトハウスの重要な事業の一つとして、1,200冊の点字図書をもって点字図書館の開設に至る。加藤俊和は、「1936(昭和11)年に発行された『ライトハウス年報』の昭和10年度事業概要の中では、「点字写本・点訳」という表現を使用している」と記述している(加藤2002:165)。

その後、本間一夫(1915-2003)が創設した日本盲人図書館に於いても、1940(昭和15)年から点訳奉仕活動が始動した。本間の知人である雨池信義が紹介した後藤静香(1884~1969)は「心の家」の同志に呼びかけ、その中央部で自らその講師となり、毎月2回点字講習会を開催した。後藤に深く傾倒する人たちの中から優秀な点訳奉仕者が誕生した。1943(昭和18)年には、後藤が団長を務める「大日本点訳奉仕団」の活動や井上英会話スクール校長の井上当蔵夫妻の発起による「点字奉公会」の結成が新聞で報じられた。これらの点訳奉仕活動は日本盲人図書館の貴重な図書供給源の二大潮流となった(本間1980:56-66、本間2004:492-493)。

日本点字図書館の前身となる日本盲人図書館に関する史的研究は、相次ぐ二度にわたる諸資料の発見に伴って活動実態が明らかにされてきた。立花明彦は「日本盲人図書館についての研究は一定の成果を収めつつあると言える」としつつも、これに反して、改称して再出発した「日本点字図書館」としての新たな歩みを始めた「当初の実態は十分研究されているとは言い難い」と指摘している(立花2020:23-24)。

復興時の『昭和23年版日本点字図書館概要』と題したリーフレットには、本間が記した「記念事業の二大目標」、すなわち、①図書館の再建、および②点字図書増加のための「点訳運動」が明示されている。とりわけ「点訳運動」の第1期目標として、1ヶ年間に1,000冊の新しい点字図書を得るため、年4冊を書き上げる250人の奉仕者を求める運動を展開したことを公表し、広く点訳奉仕を呼びかけている(立花2020:32-33)。

そこで、本稿では昭和23年度から朗読奉仕が創始するに至る昭和33年度までの史実に着目し、日本点字図書館が所蔵する『感謝録』に綴られた「事業報告」を対象に諸データの収集整理を試みた。「日本点字図書館」と改称して戦後の再出発した図書館事業発展の要因を明らかにするこ

とが本研究の目的である。

1. 研究対象の図書館事業の変遷

1940（昭和15）年11月10日に創設した日本盲人図書館の蔵書は、1944（昭和19）年3月、茨城県への疎開時に2,300冊であったが、北海道増毛の実家に2度目の疎開をしてからも蔵書は増加し、1947（昭和22）年末の時点で3,000冊を超えていた。1948（昭和23）年3月に東京復帰を果たした本間一夫は、4月1日をもって「日本点字図書館」と改称して点字図書館事業を展開した。創立当時の目標だった5,000冊の蔵書は1950（昭和25）年に達成した。しかし、創立以来、無料であった貸出は、東京復帰以後、インフレの影響に対処するため会費制度に変更せざるを得なかった（日本点字図書館50年史編集委員会編 1994：85）。

2. 研究の調査方法

日本点字図書館が所蔵する『感謝録』には「事業報告」が綴られており、史実を把握する上で有用な原本である。昭和30年度以降は『感謝録』というタイトルが明記されるようになるが、それまでの掲載記事は「感謝の言葉」「事業報告」「寄附者御芳名」で構成されており、『感謝録』というタイトルは掲げられていない。また、この綴りには昭和23年度と昭和24年度は欠号と記されていたため、閲覧可能な資料は昭和25年度から昭和33年度の「事業報告」に限定される。

筆者は、2022（令和4）年4月から10月にかけて日本点字図書館に於いて調査研究活動を実施した。

3. 調査結果と考察

同館が所蔵する諸資料を閲覧し、収集した情報を整理した結果、①「図書貸出の実態」、②「点訳奉仕者の育成」、③「図書館蔵書数の増加への貢献」に関する史実が浮かび上がってきた。調査結果はこの3つの項目の別に報告する。

3-1. 図書貸出の実態

はじめに、日本点字図書館に於ける図書貸出の実態を明らかにするため、「事業報告」に記載されていた「図書貸出数」及び「読者増加数」に関する調査結果を以下に報告する（表1）。

日本点字図書館の再出発から10年度目となる昭和33年度は40,956冊の図書貸出数に達した。昭和25年度から昭和33年度に至る図書貸出総数は延249,869冊に上り、蔵書の貸出数増加経過傾向は顕著であった。

「図書貸出数」の増加傾向は、昭和25年度の最小「図書貸出数」17,186冊に比して昭和33年度の最大「図書貸出数」は40,956冊であり、約2.38倍の数値を示した。また、「読者増加数」の

表1 図書貸出数および読者増加数

年度	図書貸出数 (単位：冊)	読者増加数 (単位：名)	年度末読者数 (単位：名)
昭和 25	17,186	168	1,000
昭和 26	18,919	170	1,170
昭和 27	18,944	185	1,354
昭和 28	22,454	274	1,628
昭和 29	25,851	398	2,026
昭和 30	31,993	480	3,506
昭和 31	36,022	410	2,917
昭和 32	37,544	406	3,323
昭和 33	40,956	398	3,721
合計	249,869	2,889	20,645

出典：日本点字図書館所蔵『感謝録』綴りの昭和25年度～昭和33年度「事業報告」よりデータを収集整理し、筆者が作表した。

増加傾向は、昭和25年度の最小「読者増加数」168名に比して昭和30年度の最大「読者増加数」480人であり、約2.86倍の数値を示した。昭和25年度から昭和33年度の年度末読者数は延20,645名となり、延図書貸出総数249,869冊に照らすと読者一人当たり平均12.1冊の図書貸出があったことが推量される。

本間は「郵便による点字図書の貸出も、年を追って増加しておりました。(中略) このように事業は着実に発展していました。盲人の日常生活も、戦後の混乱から少しずつ抜け出て、読書への意欲が高まって来た結果ともいえましょう」(本間1980:94)と述べており、当時の状況を裏付ける調査結果が得られたといえよう。

3-2. 点訳奉仕者の育成

次に、日本点字図書館に於ける点訳奉仕者の育成について着目し、「事業報告」に記載されていた「新点訳者の育成」に関する調査結果を以下に報告する(表2)。

立花は「本間の図書館が利用者である盲人の支持を得、利用者数と貸出数を伸ばし、順調な発展を続けてきた要因の一つは点訳奉仕者による着実な蔵書の増加にある。戦後においても終戦の年から点訳奉仕者による点訳は継続され、完成した図書が届けられてはいたものの、実働数は戦前に比べ減少し、それに伴って新着図書の数も従前に比べ落ち込んでいた。図書館の再出発においては、蔵書の充実、新着図書の増加は不可欠であり、それが再出発の成功の是非を左右する要素でもあり、点訳に携わる奉仕者の数も増員することが求められた」と指摘している(立花2020:27)。

本調査の結果、新点訳者育成は、「来館奉仕者への面接指導」と共に「点訳者関係通信指導」

表2 新点訳者の育成

年度	新点訳者 育成数 (単位：名)	年度末 奉仕者数 (単位：名)	来館奉仕者へ の面接指導 (単位：回)	点訳者関係 通信指導 (単位：通)	通信指導の 一日平均数 (単位：通)
昭和 25	約 210	約 400	延 300	4,740	13 弱
昭和 26	約 300	約 650	約 420	6,583	22 弱
昭和 27	386	約 850	約 450	9,946	33 弱
昭和 28	427	約 1,050	約 420	11,123	39
昭和 29	1,150 ※1	—	470	15,169	約 50
昭和 30	1,707 ※2	—	約 490	22,566	—
昭和 31	2,614	—	506	24,739	—
昭和 32	3,662 ※3	—	524	30,898	—
昭和 33	2,559 ※4	—	282	23,040	—
合計	13,015	約 2,950	約 3,862	148,804	157

出典：日本点字図書館所蔵『感謝録』綴りの昭和 25 年度～昭和 33 年度「事業報告」よりデータを収集整理し、筆者が作表した。なお、原本「事業報告」から表 2 に書き写したデータは、下記の説明文（※1～4）から該当する数値だけを書き写したものである。

※1 昭和 29 年度

本事業の最大特色である点訳奉仕運動は此の 1 年間に於いても、NHK を始め各新聞雑誌社の協力により、新規申込者約 1,150 名、その中、読み方を了えて書き方練習にはいったもの約 480 名を得ました。

※2 昭和 30 年度

本年度の最大特色である点訳奉仕運動は、この期間においても放送・新聞・雑誌社等の協力により、新規申込 1,707 名、そのうち読み方を終えて書き方練習にはいったもの 966 名を得ました。この人々に対しては各個別に点字の指導をし、優秀者には点字器又は点字練習器を無料貸与した他、点訳書製作用紙と練習用紙を提供しました。

※3 昭和 32 年度

点訳奉仕運動は、放送・新聞・雑誌社等の協力により、新規申込 3,662 名、その中読み方を終えて書き方練習にはいったもの 1,415 名。この人々に対しては個別に点訳指導をし、優秀者には練習器または点字器を貸与したほか、練習用紙、点訳用紙を提供。

※4 昭和 33 年度

点訳奉仕運動は、放送・新聞・雑誌社等の協力により、新規申込 2,559 名、その中読み方を終えて書き方練習にはいったもの 881 名。この人々に対しては個別に点訳指導をし、優秀者には練習器または点字器を貸与したほか、練習用紙、点訳用紙を提供。

に費やした様子が浮かび上がってきた。当時、点訳奉仕に関する話題は、ラジオ放送や新聞記事、雑誌の掲載記事などのメディアを介して発信された。NHK「婦人の時間」（昭和 24 年 2 月 4 日放送）や、秋山ちえ子の「私の見たこと聞いたこと」（昭和 27 年 1 月 22 日放送）では婦人層にアピールした。荒垣秀雄の「天声人語」（昭和 26 年 5 月 15 日朝日新聞）や本間自身が寄稿した「点字の世界」は『文藝春秋』に掲載された（昭和 26 年 2 月号）。本間は「これらは以外に大きな反響があった」と述べている（本間 1980：92）。

新点訳者の育成数は、その増加傾向を顕著に示した。昭和25年度から昭和33年度までの新点訳者の育成総数は13,015名に達した。年度によるが、新規申込者の中には、「点字の読み方を了えて書き方練習にはいった経過」が報告されている。

加藤善徳は「私どもの経験によれば、一人の点訳奉仕者を育てあげるのには、通信教授で普通6カ月はかかる。点字写本にまでこぎつける人は、最初の申込者の3%にすぎない。それゆえ、点訳奉仕の希望者を発見し、これを育成することは、現在の点字図書館にとって、貸出以上に精力を奪われる仕事である」（加藤1957：504）と述べており、新規に点訳奉仕者を育成することに難渋する状況が推察される。今般の調査からは、最終的に新規申込者の中で点訳奉仕者として活動された割合を読み取る情報が不足しており、本稿で報告するに至っていない。しかし、新点訳者育成申込者の中から、自ら道を拓いた新規点訳奉仕者が誕生し、すでに奉仕活動を推進してきた先輩の点訳奉仕者ととも蔵書数の増加に尽力されたことは推察できよう。

3-3. 図書館蔵書数の増加への貢献

最後に、日本点字図書館に於ける図書館蔵書数の増加への貢献について着目し、「事業報告」に記載されていた「図書増加冊数」に関する調査結果を以下に報告する（表3）。

表3 図書増加冊数について

年度	年度末蔵書数 (単位：冊)	図書増加冊数 (単位：冊)	「図書増加冊数」の内訳			
			点訳奉仕者からの寄贈書 (単位：冊)	購入出版書 (単位：冊)	盲人読者の点写奉仕によるもの (単位：冊)	寄贈されたもの (単位：冊)
昭和25	5,159	890	420	320 ※1	—	150 ※2
昭和26	5,908	749	652	97	—	—
昭和27	7,056	1,148	990	—	158	—
昭和28	8,537	1,481	1,213	—	268	—
昭和29	10,334	1,997	1,247	247 ※3	303	—
昭和30	11,953	1,619	1,335	24	212	48
昭和31	14,015	2,062	1,424	419 ※4	146	73
昭和32	15,206	1,729	1,547	—	124	58
昭和33	17,107	1,901	1,496	237	99	69
合計		13,576	10,324	1,344	1,310	398

出典：日本点字図書館所蔵『感謝録』綴りの昭和25年度～昭和33年度「事業報告」よりデータを収集整理し、筆者が作表した。なお、※印のついている数値は、「事業報告」に明記された以下の文中から転記したものである。

- ※1 昭和25年度「購入出版書 其の他」として320冊が記録されている。
- ※2 昭和25年度「アメリカからの寄贈原書」として150冊が記録されている。
- ※3 昭和29年度「フランス盲音楽家ギュジュネム氏と朝日新聞社の厚意による特別寄付金を以て出版

書 247 冊を購入しました」と記録されている。

※4 「昭和 31 年度 宮城道雄記念文庫として宮城家より寄附金 10 万により購入」と記録されている。

本間は「点字図書館にとって、何よりも大切な、なくてはならぬものは点字図書です。その図書は、点訳奉仕者の努力によって確実にふえて行きました」と述べている（本間 1980：94）。戦後の再出発から 10 年度を経た昭和 33 年度末の蔵書数は 17,107 冊に至り、昭和 25 年度末の蔵書数 5,159 冊の約 3.32 倍に達した。この間の「図書増加冊数」の総数は 13,576 冊である。

興味深いのは、この「図書増加冊数」の内訳である。この内訳は、蔵書の増加に貢献したことを示唆する項目で、記録された年度の順に次の 4 つの項目が浮かび上がってきた。集計経過からは、第 1 に「点訳奉仕者からの寄贈書」、第 2 に「購入出版書」、第 3 に「盲人読者の点写奉仕によるもの」、第 4 に「寄贈されたもの」に分類され、各年度の実数が明らかになった。

本調査の結果、再出発から 10 年度を経た昭和 33 年度には、昭和 25 年度の「図書増加冊数」890 冊の約 15.3 倍となる図書増加冊数 13,576 冊に至った。この内訳を表 4 に示す。

表 4 図書増加冊総数 13,576 冊の内訳

点訳奉仕者からの 寄贈書	購入出版書	盲人読者の点写奉仕に よるもの	寄贈されたもの
10,324 冊 (77.2%)	1,344 冊 (10%)	1,310 冊 (9.8%)	398 冊 (3%)

出典：日本点字図書館所蔵『感謝録』綴りの昭和 25 年度～昭和 33 年度「事業報告」よりデータを収集整理し、表 3 の図書増加冊総数の内訳に着目して筆者が作表した。

集計の結果、「図書増加冊数」にもっとも貢献したのは「点訳奉仕者からの寄贈書」10,324 冊（77.2%）が最も多く、次いで、「購入出版書」1,344 冊（10%）、そして「盲人読者の点写奉仕によるもの」1,310 冊（9.8%）、「寄贈されたもの」398 冊（3%）であることが判明した。

表 4 は、「点字図書館にとって、何よりも大切な、なくてはならぬものは点字図書であり、その図書は、点訳奉仕者の努力によって確実にふえて行きました」（本間 1980：94）という本間の記述を裏付ける調査結果を明示している。とはいえ、点字図書館の蔵書数増加に貢献した奉仕活動は点訳奉仕に止まらない。特筆すべきは、「購入出版書」に匹敵する割合を示した「盲人読者の点写奉仕者」の活動実績である。この同胞による点写奉仕、すなわち「盲人読者による点写奉仕」が日本点字図書館の蔵書数増加に貢献した奉仕活動の一翼を担っていた証である。

本間が編集した同館発行の『点訳通信』の 47 報には、「点訳書の寿命と転写⁵⁾ 奉仕」と題する記事が掲載されており、1956（昭和 31）年 7 月当時の「奉仕者」の実態を伺い知ることができる。「（前略）本館には晴眼篤志家の皆様が活字から点字への写本にご奉仕下さるように、盲人読者の中にも点字から点字への写本（このことを転写といいますが）奉仕をしている約 30 名の篤志家あります」（本間 1956：1）と言及している。これは、同胞による奉仕活動、すなわち「事業報告」に明記されていた「盲人読者の点写奉仕」の所在を示唆していた記述といえよう。

おわりに

本稿は昭和23年度から朗読奉仕が創始するに至る昭和33年度までの史実に着目し、日本点字図書館が所蔵する『感謝録』に綴られた「事業報告」調査を試み、「日本点字図書館」と改称して戦後の再出発した図書館事業の発展要因を探った結果報告である。

調査の結果、図書館事業発展の主たる要因は、蔵書数増加にもっとも尽力した点訳奉仕活動である。事業発展への貢献度は「点訳奉仕者からの寄贈書数」をもって実証された。

なお、特筆すべき研究成果は、同胞による奉仕、すなわち「盲人読者による点写奉仕」が奉仕活動の一翼を担っていた史実が判明したことである。

本間は、「盲人に縁もゆかりもない方々でさえ、盲人のためご奉仕くださるのだから自分たちも安閑としてその行為を受けてばかりはいられない。晴眼者の方の尊い奉仕をさらにより多く効果あらしめるためにと、この盲人篤志家達は張り切っているのです」として、「川畑彰（大阪）、小笠原秋一（東京）、久野英子（大阪）、佐藤ちえ（徳島）、藤城三郎（千葉）、今田みのえ（大阪）、松原由之（鳥取）、上野和恵（甲府）の皆さんは、数十冊から100冊に近い点写書を黙々として本館に送っています」と、前掲の『点訳通信』の47号に紹介している（本間1956：1）。この「盲人読者の点写」による奉仕活動は、戦後の再出発からいつまで実践されていたのだろうか。

今後の課題は、昭和34年度以降の「事業報告」調査を継続し、その史実を探ることである。同胞による点写奉仕活動の実態を明らかにするためには「記録ノート」⁶⁾の発見が急務である。

〔註釈〕

- 1) 身体障害者福祉法は、1949（昭和24）年12月、議員立法の形で成立し、翌1950（昭和25）年4月1日から施行された。
- 2) 奉仕者の「手書き写本」とは「点字写本」を指している。日本盲人図書館では後藤静香が「点訳」「点訳奉仕者」と唱えたことから、諸資料には両者の書き方が散見される。
- 3) 「晴眼者」（せいがんしゃ）とは、視覚障害関係の間でしばしば用いられる語。視覚障害者に対して通常の視覚を有する人を意味する。
- 4) 日本ライトハウスの創業は、創業者の岩橋武夫（1898 - 1954）が1922（大正11）年の秋、自宅に「点字文明協会」を設け、仲村式点字製版機と手動式点字印刷機によって『点字日エス辞典』を刊行したことから始まる。以来、本年が創業100年という大きな節目の年に当たる（関2002：10-11、20-21、橋口2022：10）。
- 5) 「転写」は誤字である。本間の点字原稿から墨字のガリ版刷り用原稿を作成する際に「点写」とすべきところを「転写」と書いたと推察される。本稿では、掲載記事のまま「転写」を用いた。
- 6) 日本点字図書館奥村文庫の濱田幸子氏より旧職員の伊藤邦子氏に聞き取りをさせていただいたところ、「盲人読者の方に点写を依頼していたことを記憶しておられ、だれでもいいというわけではなく、きれいな点写をする方をお願いをしていた。記録は大学ノートにしていたと思う」との貴重な証言が得られた（2022年10月12日付）。

〔謝辞〕

本研究のために、貴重な諸資料の閲覧許可を賜りました日本点字図書館理事長の長岡英司先生、また本稿のご閲を賜りました館長の立花明彦先生、資料の収集整理ならびにご助言を賜りました本間記念室の伊藤宣真様、濱田幸子様、川島早苗様に多大なご高配を賜りました。また、旧職員の伊藤邦子様より「点写奉仕」に関する貴重なご示唆を賜りました。ここに記して深甚なる感謝の意を表します。

〔文献一覧〕

- 橋口勇男（2022）「日本ライトハウス点字出版の歩み」『視覚障害』（413）、10-15.
- 本間一夫（1956）「点訳書の寿命と転写奉仕」『点訳通信』47報、日本点字図書館.
- 本間一夫（1980）『指と耳で読む』（岩波新書 黄版138）、岩波書店.
- 本間一夫（2004）「日本の盲人福祉事業：点字図書館」『世界盲人百科事典』489-493.
- 加藤俊和（2002）「第2節 点字図書館の発展」日本ライトハウス21世紀研究会編『わが国の障害者福祉とヘレン・ケラー：自立と社会参加をめざした歩みと展望』教育出版、164-173.
- 加藤善徳（1957）「点字図書館の現状」『図書館雑誌』51（11）、502-506.
- 日本点字図書館50年史編集委員会編（1994）『日本点字図書館50年史』日本点字図書館（非売品）.
- 関 宏之（2002）「第1章 わが国の障害者福祉と岩橋武夫の先駆的活動」日本ライトハウス21世紀研究会編『わが国の障害者福祉とヘレン・ケラー：自立と社会参加をめざした歩みと展望』教育出版、2-22.
- 立花明彦（2020）「日本における本格的な点字図書館の誕生と発展：震災からの復興、初年度の活動実態」『Journal of I-LISS Japan』3（1）、22-39.